2017年7月23日中野教会・聖書の学び

聖書箇所：アモス書9:11-15

　　　　　　　　　　　　　　**「アモス：裁きの告知」**

　本日の聖書箇所はアモス書の最後の部分です。「後の日の回復」と名付けられている箇所ですが、イスラエル王国、ユダヤ王国の両王国が、その罪のため滅亡したのち、いつの日か、イスラエルを嘗てのように、栄光輝く王国に復興する、という希望を語る箇所です。実はアモス書は9章までありますが、最初からずっと裁きの話で、最後の一寸だけ希望の描写があるのです。最初からずっと読んでいくと、イスラエルの回復は最後にちょっとだけですので、アモス書というと、裁きの書という記憶しか残らないかもしれません。実は私がそうでした。アモス書だけは夢も希望もなく破滅の話だけだと、思い込んでいました。実は短いながらもチャンとあるんです。その希望のメッセージのところにいくまで、どうしても暗い話をしなければなりません。

　まずアモスと言う人物についてです。1:1に簡単な描写がされています。ちなみにアモスという言葉は「a:mas、荷物を運ぶ」というのが原義です。あまりにも重い裁きのメッセージを語る使命を負ったことからつけられた名前でしょう。テコアの牧者、とありますが、テコアというのは死海の西で、エルサレムの南にある、田舎のまちです。7:14で「預言者の仲間でもなく、牧者であり、いちじくの桑の木を栽培していた」と言っております。ユダ王国の田舎で羊飼いをやりながらいちじくの桑の実を栽培していた、ということです。いちじくの桑の実というのは通常のいちじくと比べ味も悪く、当時、貧しい人々の食糧とされていたようです。のちに預言を、王、祭司等指導者たちにも語りますので、それなりの社会的地位にあった人であろう、と想像されます。そのようなユダヤの田舎者を主なる神が預言者として呼び出したわけです。しかも、ユダヤ王国よりずっと大きなイスラエル王国に対し滅亡の預言をしなさい、というのですから、最初はどう思ったでしょうか。おそらく、大変、面食らって、かつ抵抗を示したものと、予想されます。これに対し、7:15では「主は群れを追っていた私をとり、主は私に仰せられた。『行って、わたしの民イスラエルに預言せよ』と」記されています。主の言葉なので逃げることは出来ない、と覚悟を決めた様子が想像できます。問題はその預言の中身です。皆から嫌われる滅亡の預言です。徹底的に滅亡の預言です。だれだって、自分の住んでいる国が滅亡する、救いの道はない、などと言われれば、「そんな話は聞きたくない」というでしょう。それでも何度となく繰り返されると最後は怒って「もう来るな」とでも言いたくなります。それを「主はこう仰せられる」と言い続けるのですから、信じられない信仰です。7:10によれば、イスラエル王国の主要都市べテルの祭司アマツヤが当時の王ヤロブアムII世に「アモスは謀反を企てている」との告げ口をし、結局、アモスはイスラエル追放になりテコアに戻らざるをえなくなったようです。その最後のところでまたイスラエルの滅亡預言をします。主イエスはこのような讒言（ざんげん）により死に追いやられましたので、一部このアモスの生涯と似た所があります。預言者は苦難の運命に定められている、ということかもしれません。

　当時の政治的な状況につき簡単に説明しておきます。南のユダ王国はウジヤ王、北王国イスラエルはヤロブアムII世が王であった頃です。アモスが活躍したのはBC760年頃と言われています。北王国イスラエルの王ヤロブアムII世は北王国にヤハヴェ信仰を確立したエフー革命で有名なエフー王朝の4代目です。当時の世界情勢としては大アッシリア帝国は内部的争いで勢力が弱まっている時でした。シリアが時折、侵略してくる程度であり、北王国、南王国とも独立を謳歌していた時期です。特に北王国イスラエルは経済的成長著しくかつかなりの領土回復をもし、ソロモン時代の範図にまで回復していたようです。しかし、経済的繁栄は道徳的堕落をきたすのは世の常であり、北王国もそのような時代でした。田舎の方で伝統的生活の中に在る人間からすればみるにたえかねた状況であったでしょう。ヤロブアムII世の次はゼカリヤですが、これでヤフー王朝は終わりとなってしまいます。そのなかで、アモスは預言します。

　1章、2章は「諸国民への審判」と称せられる箇所です。ダマスコに対する審判に始まります。主は「その刑罰を取り消さない」と言われます。ダマスコはシリアの首都ですから、これはシリアに関する審判です。次がガザです。ここはペリシテの中心都市です。いまもイスラエル・パレスチナ戦争でよく戦闘が起きている都市です。次はツロです。ツロはガリラヤの西海岸にある都市でフェニキアの中心都市です。次がエドムです。ユダ王国の南のアラビアに続く地域です。エドムというのはエサウの別名です。エサウは軽率にもヤコブに長子の特権を渡してしまった人物です。エドムはそもそもはイスラエルの兄弟なのに、「剣で自分の兄弟を追う」ことになっている、と言われています。次はアモン人です。アモンはアンモンとも呼ばれ、ヨルダン川の東のギレアデの更に東の地域で、今のヨルダンです。14節に出てくるラバは今のヨルダンの首都アンマンです。アモン人はアブラハムの甥（おい）ロトの子孫ということになっています。そのイスラエルの親戚がイスラエル王国のギルアデの妊婦たちを切り裂いた、と言っています。次はモアブです。モアブは死海の東側の地域です。モアブもロトの子孫ということになっています。ケリヨテというのはモアブ人の神ケモシュの神殿があった都市です。モアブ人は「エドムの王の骨を焼いて灰にした」ということを批判されています。イスラエル古来の伝統は死者を焼くことは禁止されていました。人は土より出でて土に還ることを良しとしたからです。復活の体がなくなってしまうのは困る、という説明もあります。いずれにしろ、モアブも裁きの審判を受けます。次はいよいよ神の民イスラエルになります。ユダは主の掟を守らなかった、と責められています。今までの他民族とは異なる、理由づけになっています。のちのち問題となる律法遵守をしなかった、という罪です。そして最後にイスラエルです。2:6-8で「彼らが金（かね）と引き換えに正しい者を売り、 一足のくつのために貧しい者を売ったからだ。 7 彼らは弱い者の頭を地のちりに踏みつけ、 貧しい者の道を曲げ、 父と子が同じ女のところに通って、 わたしの聖なる名を汚している。8 彼らは、すべての祭壇のそばで、 質に取った着物の上に横たわり、 罰金で取り立てたぶどう酒を 彼らの神の宮で飲んでいる」と言われています。ここには経済的繁栄から、「なんでも金（かね）」という状況になっているイスラエルの国が見えます。貧富の格差が拡大し、弱い者が圧迫されています。一点注意しておきたいことがあります。2:6節の最後に出てくる「正しい者」とはどのような人か、ということです。神の義に適った人、ということですが、「彼らが金と引き換えに正しい者を売った」と言われていますので、そのあとに見られる「貧しい者」、「弱い者」のことで、これらの人々を奴隷として売ってお金にしたことを言っているのだと思われます。要するに、神の目から見て義なる人、正しき人とされているのは「貧しい者」、「弱い者」であるということです。「正しい者」という言葉はヘブル語で「ツァディーク」と言いますが、イスラエル信仰の下では「貧しき者」「弱き者」をイスラエルの民として公平に扱っている社会のことです。北王国イスラエルは、そのような神の義に適っていない生活に落ちているとして裁きの審判を下されるのです。これらの裁きの審判は「主はこう仰せられる。 「xxxの犯した三つのそむきの罪、 四つのそむきの罪のために、 わたしはその刑罰を取り消さない」」という厳しい裁きの言葉から始まります。この3つと4つを足すと7つですが7はイスラエルでは完全数ですから、此処の意味は「すべての罪のために、刑罰を受けるよう定められた」という意味と解釈できます。この三つ、四つ、という言い方はアモス書以外では箴言に出てきます。箴言30:18には「私にとって不思議なことが三つある。 いや、四つあって、私はそれを知らない」とありますが、これは“世の中に不思議なことは沢山あるが完全に理解することなどとてもできない”という意味で使われています。いずれにせよ、イスラエル及びその周辺国はすべて、主なる神の罰からのがれることは出来ず、滅亡の運命にある、というのです。アモスはこのような不吉な預言を述べ伝えたのです。

　3章から6章まではイスラエルの罪を繰り返します。いくつかポイントとなる言葉についてのみ説明します。3:8に「獅子が吠える」とあります。これは神の怒りの表現の一つです。選ばれた民が罪に堕ち、神の義と逆な事をしているとして神様は怒（いか）っておられる、というのです。14節では「わたしはベテルの祭壇を罰する」といわれています。ベテルはイスラエル王国の祭壇がある地です。サマリアが首都ですがベテルは宗教都市、門前町と言って良いでしょう。「祭壇の角は折られて、地に落ちる」と言われていますから、祭壇としての権威をはく奪される、ということです。4:1に「バシャンの雌牛ども」とあります。バシャンは酪農が盛んで豊かな地と考えられていたようですから、そこで弱い者を搾取して肥え太った雌牛どもに裁きが下される、という訳です。4:6に「歯をきれいにしておき」とありますが、「飢饉によって全く食べ物がなくなる」ということです。6節の最後に「それでもあなたがたは/わたしのもとに帰ってこなかった」と言っています。あれだけの災害となった福島原発の原因さえ良く把握できておらず、かつ避難者の生活の目途も全く立っていないのに原発の再稼働と言っているのは信じがたい、というのが多くの人の気持ちでしょう。外国人からは、日本は全く反省のない国の代表としてみられています。主にあって御旨はどこにあるのかを真剣に祈り求め、主の声に従う必要があります。おそらく、電力会社のトップも本当はもう原発はやめたい、と思っているに違いありません。あえてそれを再開しようとしているのはまずは補助金目当ての地方公共団体、特に原発がある市町村です。次は、完全停止ということだと、電力会社は原発関連の資産の償却をしなければなりませんし廃棄費用もかかります。その期が赤字になるのみならず、自己資本が飛んでしまうかもしれません。これが再稼働の理由です。安全など二の次なのです。みんな正直に言わないため、「原発動いてなくても、まわっているのに、なぜ再開するのだろうか」という疑問が解けません。本当はお金のことなのに、もっともらしく理由をつけるのは古来から変わらない「うそつき」です。

6節以降にさらにイスラエルに対する罰の具体的内容がかいてあります。飢饉、黒穂病、いなごの災害などです。そして「それでもあなたがたは/わたしのもとに帰ってこなかった」といわれています。ソドムとゴモラに比較されて語られ、そして「それでもあなたがたは/わたしのもとに帰ってこなかった」と繰り返されます。それでも12節で「あなたは神に合う備えをせよ」といわれています。そして5章―6章でアモスのイスラエルに対する哀歌が読まれます。何度言っても主に立ち返らないイスラエルの民に主は「わたしを求めて生きよ」と語りかけます。5：6で再度「主を求めて生きよ」と言われています。7節では「彼らは公義を苦よもぎに変え、 正義を地に投げ捨てている」と述べられています。ここに「公義と正義」という２つの言葉が出てきます。神の義を示す二つの言葉です。公義と訳されているのはヘブル語では「ミシュパート」ということばで「裁判」を意味する語です。「公平」とも訳されます。「正義」と訳されている言葉は先ほどの「正しき者」の名詞形であり「ツェダカー」という語です。通常「正義」と訳されています。派生して、「救い」の意味で使われることもあります。この「公平と正義」が神の義であり、8節以降に記されていることからして、貧しき人々を救う社会でなければならない、ということです。

また5:14で「善を求めよ。悪を求めるな。 そうすれば、あなたがたは生き、 あなたがたが言うように、 万軍の神、主が、あなたがたとともにおられよう」と言われています。当時最も高い文化と言われていたギリシャ哲学では「善」が最高価値とされておりました。ギリシャ哲学の「善」が抽象的な概念と言うべきものであるのに対し、イスラエルの信仰では具体的です。ここで「善」は15節にある「正しい裁き」を意味します。これは「ミシュパート」という一つの単語であり、先程「公義」「公平」と訳した言葉です。「善」を愛する、ということは「公平」を実現することだ、と言っています。18節に「主の日」のことが書かれています。通常の言い方では「終末の日」です。この世に対する主の怒りが示され、異教徒は主に裁かれるとともに、イスラエルは栄光の中、世界の支配者として立たせられる、というイスラエルの人々の目からみれば、消極面と積極面の両方がありますが、ここでアモスが言っているのは消極面しか現れない、というのです。裁きと救いは対（つい）になっているのですが裁きの面しか現れない、というのです。終末の時においても、これでは、夢も希望もない、というしかありません。25節―27節は使徒の働き7:42-43で殉教直前の状況でのステパノの説教で引用されています。イエス・キリストを信じないユダヤ人に対し、あなたたちは祖先の頃から偶像礼拝をしてきた、ということの証拠として挙げています。6章に入ってもイスラエルに対する裁きの告知は止まりません。6:2にカルネ、ハマテ、ガテの町の名前がでてきますがこれらは当時、イスラエル王国やユダ王国が支配をしていた地域です。アモスはこれらの地域を支配しているのは神の恵みとしてイスラエルに与えられているだけなのに、自分たちの力を過信すると、報復の時代が来て、そのことは「暴虐の時代を近づけている」だけだ、と言うのです。とうとう、8節で「神である主は、ご自分にかけて誓われる。 －－万軍の神、主の御告げ－－ わたしはヤコブの誇りを忌みきらい、 その宮殿を憎む。 わたしはこの町と、 その中のすべての者を引き渡す」と言われます。神様が「御自分にかけて」とおっしゃられるのですから、最高に強い、強調の表現です。ヤコブの誇りですから北王国と南王国の両方です。「引き渡す」というのは戦争で負けることです。そのあとは奴隷の生活が待っています。12節では「あなたがたは、公義を毒に変え、 正義の実を苦よもぎに変えた」とまで言われています。14節ではアッシリアがイスラエルの北から南までを占領しイスラエルを虐げる、と言っています。

　7章、8章そして9:10まではアモスに幻が示され、イスラエルの運命を告げます。注意すべきはアモスの訴えに応じ、主は2度イスラエルの民を完全に滅ぼすことを「思い直」されていることです。3節、6節にこの言葉が出てきます。この「思い直す」という語は「ナーハム」という動詞です。これは「憐れむ」という意味もあります。イスラエルの民を憐れまれ、完全に滅ぼすことを思い直された、のです。この言葉は「悔い改める」の意味もあります。このような二重、三重の意味のある言葉が使われていることは興味あることです。それから10節に祭司アマツヤがアモスを讒言し、イスラエル王国より追い払ったことがでています。単純に殺されたわけではありませんので、アモスのいう事を支持するグループもあったのではないか、と想像します。それでも主はイスラエルに裁きの告知をせよ、と言います。主の思い直しで一寸希望が出てきたかと思いきや、やはりだめです。17節をお読みします。「主はこう仰せられる。 『あなたの妻は町で遊女となり、 あなたの息子、娘たちは剣に倒れ、 あなたの土地は測りなわで分割される。 あなたは汚れた地で死に、 イスラエルはその国から 必ず捕らえられて行く。』」。“もうだめだすべての希望も消え失せた”というところでしょう。8章ではこれに畳み掛けて、イスラエルの滅亡が幻で語られます。有名な事ですので申し上げておきますと、1節、2節の「夏の果物」は「カイツ」と言い、2節のイスラエルに終わりが来た、の終わりは「ケーツ」と言います。Spellingでみると、「カイツ」には「イ」が入っている違いだけです。このような言葉あわせは沢山あります。そのなかで、この部分は有名な箇所です。「カイツ」と「ケーツ」です。このあとはイスラエルの最後の情景が描写されます。「貧しい者」を踏みつけ、「欺きのはかり」で税を取り立てたイスラエルの最後の時が来ました。しばしば引用される一節をお読みします。11節です。「見よ。その日が来る。 －－神である主の御告げ－－ その日、わたしは、この地にききんを送る。 パンのききんではない。 水に渇くのでもない。 実に、主のことばを聞くことのききんである」。「主の言葉」の飢饉がくる、といわれています。イスラエルの民は神の言葉によって生きていく民ですからその言葉が聞けない、ということは滅びる、ということです。パンの飢饉ではなく「主の言葉を聞くこと」が消えてしまったことが決定的である、ということです。これは申命記8:3「人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる」とあり、この節はイエス様の悪魔の試みのところで引用されて悪魔の誘いをはねのける盾となります。マタイ4:4です。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある」と言われています。「神様の言葉」が重要なのです。「言葉」というのは狭い意味での言葉そのものを指しているにとどまらず、神によって起こされる「出来事」も意味します。また「聞く」という言葉も単に耳で聞くのみならず「聞いて完全に納得する」ことを意味しています。したがって、11節に示された状況は神に見捨てられ、もはや神の言葉も聞かれず、神がはたらき何かをおこすということもなくなる、ということです。9章に入ってもこの幻が続き主の裁きの言葉が臨みます。1節に「残った者」という言葉がでてきます。イスラエル王国、ユダ王国滅亡後、社会的上層部は捕囚と称し、捕らわれ、奴隷の身となりますが、その時、異教の信仰に向かわずイスラエルのヤハウェ信仰に残された者、の意味です。この「残された者」にイスラエルの信仰継承の望みが託されるのですが、9:1で、それらの者も剣で殺される、と言われています。そして、7-10節でエジプト、ペリシテ、アラムの国々も滅ぼされる、といわれています。しかし、「ヤコブの家を全く根絶やしにしない」と言われ、かすかな希望は残されます。

　そして、本日の聖書箇所「イスラエルの復興」の箇所にたどり着きます。これはアモスに示された幻の一部であり、イスラエルの民に告げられた言葉ではありません。従ってイスラエルの人々はこのような希望をアモスが見ていたことを知らないのです。主の日におきることは「イスラエルの繁栄をもとどおり」にされることです。12節でエドムと主の名の下にあるすべての国が再び真の意味で主の支配下に入ることを言っています。この11-12節は使徒の働き15:16-18で主の兄弟ヤコブの説教の中で引用されています。17節をお読みしますと「それは、残った人々、すなわち、 わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、 主を求めるようになるためである」とあります。異邦人が主を求めるようになる、という預言の言葉とされ、異邦人伝道の正当化の言葉として使われています。このような表現は新約の人々が旧約聖書のギリシャ語訳を使っていたからではないかと推測されています。ギリシャ語訳には確かに“異邦人が主を求めるようになる”と書いてあるからです。しかし、ヤコブはヘブル語聖書にも通じていないはずはありません。おそらく一般の人々は世界語のギリシャ語で旧約聖書を読んでいたからでしょう。このように旧約聖書の文章がオリジナルの聖書とは異なった訳で新約聖書で引用されているケースもあります。その意味で、ここは、とくに有名な聖書箇所です。ある時点で言葉がそれ自身として自立して、本来の前後関係から切り離されて使用されるようになったからでしょう。それ自身として悪い事でもなんでもないのですが、注意を要することは事実です。

13節以降ではエデンの園のような情景描写です。お読みします。「見よ。その日が来る。 －－主の御告げ－－ その日には、耕す者が刈る者に近寄り、 ぶどうを踏む者が種蒔く者に近寄る。 山々は甘いぶどう酒をしたたらせ、 すべての丘もこれを流す。14 わたしは、 わたしの民イスラエルの繁栄を元どおりにする。 彼らは荒れた町々を建て直して住み、 ぶどう畑を作って、そのぶどう酒を飲み、 果樹園を作って、その実を食べる。15 わたしは彼らを彼らの地に植える。 彼らは、 わたしが彼らに与えたその土地から、 もう、引き抜かれることはない」と あなたの神、主は、仰せられる」。これでアモス書は完結です。

　この直前のヨエル書の成立年代に議論あり、BC800、600、400の3つの説がありますが、もし、BC600年、400年頃の説をとるならば、アモス書が預言書として最古のものになります。BC800年説をとってもヨエル書に次いで2番目です。イザヤ、エレミヤの預言の骨格は既に、アモス書で語られている、と言えます。その預言書は最後のところで天国の描写のような幻がでてくるのですがそれ以外はずーっと裁きの告知です。わたしが驚くのは、皆から嫌われ、排斥されても、主の言葉をたがえず、この裁き・破滅の預言をするアモスの強靭さです。主なる神に従わねばならない、という強い信仰がこれを貫徹させているエネルギーです。この強靭さ、ある意味では狂気が後のユダヤ人の歴史を貫いています。通常であればとうに死滅したはずの民族が今も大きな影響力をもって生きているのです。奇跡と言わざるをえません。唯一の生きる力は主なる神への「希望」です。私個人はとてもアモスのような強さは維持できませんが、時には「このままいけば日本民族は破滅の運命にある」と叫ばなければならない、時があるのかもしれません。祈ります。

（ご在天の父なる神様、今日はアモス書から学びました。アモスによる痛烈な裁きの預言、そして最後に神の国の希望が掲げられています。イスラエルの民はその苦難の歴史の中で、その主にある希望のみで生きてきました。世界の、日本の状況を見ると、人間の罪の極致を見るような現在です。私たちにも希望が必要です。主イエスの再来を希います。マラナタ、主よ、来たりませ。我らの救い主、イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）